

多治見方言における動詞のアクセント(2)

安 藤 智 子

富山大学人文学部紀要第74号抜刷

2021年2月

多治見方言における動詞のアクセント(2)

安藤 智子

0. はじめに

中輪式と内輪式の東京式アクセントの特徴を併せ持つ(山口2003)とされる多治見市を含む岐阜県南東部(東濃地方)の方言において、動詞のアクセントは全体として名古屋型の内輪式に近いことが、安藤(2016)から明らかになっている。その中で、名古屋と多治見のアクセントの違いとして目立つのが、特殊拍とアクセントとの関係である。山口(2003)等の先行研究を見る限り、名古屋では特殊拍にアクセント核が置かれることはないのに対して、多治見ではいくつかの動詞語形において特殊拍にアクセントを持つ型が相当数認められる。特殊拍にアクセント核が置かれる現象は京阪方言において顕著であり、この面では京阪方面の色合いを名古屋方言より多治見方言の方がより濃く備えていると言えるかもしれない。

ただし、安藤(2016)は読み上げ式の調査であり、調査方法が自然さに影響しないとはいえない。調査項目以外の動詞やその活用形、さらに様々な付属語が後続する場合のアクセントについては明らかになっていないため、これを補う調査が必要である。

本稿では、安藤(2016)をふまえ、より自然な発話における動詞のアクセントについて、特に特殊拍にアクセント核が置かれる条件を中心に、付属語を含めた形で多治見方言の談話資料を分析する。それにより、特にカ行五段動詞連用形等の音便による長母音と否定辞における撥音に一定の条件下でアクセント核が置かれることを明らかにする。

1. 読み上げ式調査におけるアクセント

安藤(2016)では、1934～1955年生まれの多治見市内各小学校区生え抜きの男女計34名を対象に、2013年に実施した読み上げ調査により得られたデータを分析している。調査項目は、中輪式の岡崎方言のアクセントと内輪式の名古屋方言のアクセントを比較して、アクセントや語形が異なるケースを中心に選定している。動詞の活用形にはひとつの方言においても数種類の語形が予想される場合があり、そのような項目については、ふだん言う言い方のものを選んで読み上げてもらった。

この調査の結果として、動詞において特殊拍にアクセント核が置かれる場合については、イ音便の長母音化した語形が報告されている。カ行・ガ行五段活用動詞は、過去形などの連用形の一部において、イ音便が引き音に交替して長母音化を生じることがある。例えば、カ行五段活用動詞<聞く>の過去形はイ音便でも長母音形でも発音上の違いはなく「キイタ」＝「キー

タ」となるが、<働く>はイ音便形「ハタライタ」または長母音形「ハタラータ」となる。山口 (2003) の名古屋方言の記述から、類別語彙でいう一類の五段活用動詞では、この種の音便を生じるカ行・ガ行五段活用とその他の活用でアクセントが異なる可能性が予測されたため、安藤 (2016) では、一類動詞<聞く><働く>の連用形を調査した¹⁾。調査した活用形は、過去形～タならびに～タラ、～タリ、中止形(テ形)ならびに～テモ、～トル(=～ている)、～テミル、～チマウ類(=～てしまう)、～テモラウ類である(このうち、～チマウ類と～テモラウ類は回答者によって異なる語形が選択されたため、「類」としてまとめる)。発音上、イ音と引き音の区別があいまいな場合もあることから、安藤 (2016) ではイ音便形と長母音形を区別せず、アクセント核の位置のみを記述している。その結果から、イ音 /J/ もしくは引き音 /R/ とアクセント核の位置の関係をまとめて、表 1、表 2 に示す。表 1、表 2 において、X は当該の特殊拍 (/J/ もしくは /R/)、□ はその後の拍、「'」はアクセント核とみられるピッチの下降があった拍を表す²⁾。最右列以外の数値は該当する回答数であり、表に数値が示されている型以外の型は現れていない。～チマウ類では複数の語形にわたる複数回答があったため、各項目の合計数が 34 を超えている。最右列に特殊拍 X にアクセント核が置かれた率を示す。

表 1 安藤 (2016) のデータにおける動詞<聞く>活用形のアクセント

「聞く」	キ'X-	キ X'-	キ X - □'□	キ X - □□'	無核	合計	キ X'-率
キ X タ	21	10			3	34	29%
キ X タラ	16	15			3	34	44%
キ X タリ	17	12			5	34	35%
キ X テ	18	13			3	34	38%
キ X テモ	20	11			3	34	32%
キ X トル	7	5	22			34	15%
キ X テミル	12	6		16		34	18%
キ X チマウ	8	7	1			37	43%
キ X チャウ	11	8					
キ X テマウ	1						
キ X テシマウ		1					
キ X テモラウ	15	10			7	34	29%
キ X テマウ					2		

表 2 安藤 (2016) のデータにおける動詞<働く>活用形のアクセント

「働く」	-ラ'X-	-ラ X'-	-ラ X - □'□	-ラ X - □□'	無核	合計	-ラ X'-率
ハタラ X タ	25	7			2	34	21%
ハタラ X タラ	25	8	1			34	24%
ハタラ X タリ	23	10	1			34	29%
ハタラ X テ	26	6			2	34	18%

多治見方言における動詞のアクセント(2)

ハタラ X テモ	25	8	1			34	24%
ハタラ X トル	19		15			34	0%
ハタラ X テミル	22	1			11	34	3%
ハタラ X チマウ	12	6	1			36	25%
ハタラ X チャウ	13	3			1	36	25%
ハタラ X テモラウ	25	3			6	34	9%

表1, 表2から, 特殊拍を核としてピッチが下降するアクセントは, 多数派とは言えないものの, 連用形の音便においては一定数現れており, 現状では調査対象の高齢層においてゆれがあるといえる段階であることがわかる³⁾。

これに対し, 次のような場合には基本的に特殊拍の直前の自立拍にアクセント核が置かれた。

- 名古屋と岡崎で語形は異なるが同じアクセントとなる意志形「～(ヨ)ー」は, キャリア文「～(ヨ)ートオモウ」に入れて調査した。調査した一段活用動詞の各語合計で, 引き音の前にアクセント核が置かれる「～(ヨ)ー'トオモウ」が123件, 引き音にアクセント核のある「～(ヨ)ー'トオモウ」は2件のみであった。
- 希望形「～タイ」は, 多治見方言では「～ター」と長母音化して発音されることが多いが, 中輪式・内輪式でアクセントが異なる一類動詞を調査したところ, 内輪式の名古屋と同様に全回答(204件)で引き音の直前の「タ」にアクセント核が置かれた。
- 仮定形では, 短形(例えば「入れれば」の意味で「イレヤ」もしくは「イレリヤ」)が多数派であり, 少数の長形12件(同, 「イレヤー」もしくは「イレリヤー」)はすべて引き音の直前にアクセント核が置かれた(同, 「イレヤー」もしくは「イレリヤー」)。
- 山口(2003)が強消と呼ぶ「～はしない」に対応する語形は, 多治見方言では「～ヘン」(五段活用動詞の例「ウリヤヘン」または「ウラヘン」(=売らない), 一段活用動詞の例「キヤヘン」または「キーヘン」(=着ない))となるが, 一段活用動詞について調べたところ, 「～ヘン」のように引き音が入る回答計77件のうち, 76件が引き音の直前にアクセント核が置かれる「～'ーヘン」であり, 引き音にアクセント核が現れる「～'ーヘン」は1件であった。

このことから, 特殊拍とアクセントとの関係をめぐっては, (i) カ行・ガ行五段活用動詞の連用形のように特殊拍とその前の拍の間でアクセント核のゆれが見られる語形と, (ii) 意志形「～(ヨ)ー」や希望形「～ター」, 仮定形長形のように特殊拍の直前にアクセント核が置かれる語形があることがわかる。

なお, 否定形「～ン」では, 一段活用動詞4語の調査から, それぞれ33～34件の有効な回答のうち, 30～33件が無核となった。この読み上げ調査では撥音が文末に位置するため, ピッチの下降がなければ無核と記述しているが, 後続の要素がある場合に撥音の後で下降するの

否かは、この調査からは不明である。この点については、本稿の調査により4.2.2.1節で明らかにする。

2. 談話資料

安藤 (2018, 2019, 2020) では、プロソディの分析を目的として、自然でありながらある程度の統制の取れた会話音声のデータを得るため、国立国語研究所 (1987) の方言談話資料を参考に、8種類の場面設定での会話を当該方言話者に依頼し、話者の許可を得て録音した。本稿では、様々な要素が後続する動詞の活用形のアクセントを調査するため、安藤 (2018, 2019, 2020) の調査で得られた談話資料を活用し、そのうち男性同士による以下の場面①～④の会話を分析対象とする。

- ・場面①「品物を借りる」：品物を借りる場面。隣人同士の2人の男性。
- ・場面②「けんかをする」：行動をたしなめた人とたしなめられた人との間での口論。対等な関係の2人の男性。
- ・場面③「新築祝い」：自宅を新築した人と、祝いに訪れた近所の人とのやりとり。対等な立場で、あまり親しくない2人の男性。
- ・場面④「うわさ」：近所の人に起きた出来事に驚いてうわさする場面。親しい2人の男性。

話者は表3に示す5組10名である（話者記号に抜けがあるのは、本稿の分析対象とする男性のみを載せたためである）。組名は録音順による。話者全員が、数年の外住歴はあっても、言語形成期を含めて多治見市内に長年居住しており、現在の居住地で少なくとも半生を過ごしてきた方々である（表3の生育地・現居住地はともにすべて現在の多治見市内）。調査時期が30年以上ずれているが、国立国語研究所 (1987) がこの場面設定に想定した、老年層の男子2名という条件には合致している（調査時69歳～90歳）。それぞれの組の2人の関係は、友人同士や近所づきあいのある親しい関係である。

表3 話者

組	話者	生年	生育地	現居住地	外住歴
1	A	1939年	錦町	幸町	なし
	B	1928年	小泉町	小泉町	33～36歳時愛知県稲沢市
2	C	1949年	中町	中町	18～22歳時東京, 22～25歳岐阜県揖斐郡坂内村(現, 坂内町)
	D	1945年	笠原町	明治町	29～34歳時名古屋
3	G	1949年	坂上町	坂上町	18～22歳時東京都
	H	1949年	田代町	田代町	なし
4	K	1941年	錦町	錦町	なし
	L	1935年	御幸町	御幸町	なし

5	O	1941年	新富町	滝呂町	なし
	P	1940年	神楽町	陶元町	1～4歳時名古屋市

録音は、1組はB氏宅、2・3・5組の録音は市内の協力者宅、4組は多治見市中央児童館において、2018年2月から8月の間に実施した。録音にはICレコーダー（Ediroll R-05）を用い、WAV形式で保存した。録音された各場面設定での談話の時間を表4に示す。

表4 談話時間

組	場面①	場面②	場面③	場面④	計
1 (A+B)	27秒	39秒	77秒	216秒	359秒
2 (C+D)	52秒	63秒	43秒	217秒	375秒
3 (G+H)	46秒	33秒	34秒	74秒	187秒
4 (K+L)	46秒	37秒	67秒	52秒	202秒
5 (O+P)	30秒	53秒	79秒	105秒	267秒
計	201秒	225秒	300秒	664秒	1390秒

3. 分析方法

録音された談話音声のスクリプトを作成し、次の方針で動詞項目を抽出した。

・複合語幹

漢語サ変動詞（例「レンシューシナカンデ」（＝練習しなければいけないから））、オノマトペ＋スル等（例「ビックリシトッタ」（＝びっくりしていた）、「ビックリコーチャッタ」（＝びっくりしちゃった））、辞書の見出し語にあるなど一語化したと考えられる語（例「セーダーテ」（＝精出して））等は、複合的な語幹を持ったひとつの動詞項目として抽出する。一方、前接する要素が助詞を伴う補語や指示詞、副詞などの場合（例「[コングラーニ] シトクカ」（＝このくらいにしておくか）、「[ホー] シタラ」（＝そうしたら））は前接する要素[]を動詞項目に含めない。

・後続要素

原則として、述語動詞は補助動詞や終助詞などを含む文の末尾までを1つの動詞項目として抽出し、モダリティやアスペクト、待遇の形式として文法化している形式名詞（例「アルワケヤナーモンデ」（＝あるわけではないものだから））や補助動詞も本動詞の後続要素として抽出する。一方、「イレナカンテ／イッタラ」（＝入れなければいけないと／言ったら）のような引用部分＋助詞と伝達動詞・思考動詞は別個の動詞項目として扱う。

・融合形

「チャシタ（＝～とおっしゃった）」「トモー（＝～と思う）」といった、先行する要素と融合した形態の伝達動詞・思考動詞は分析から除外する。

以上の方針で抽出した計386の動詞項目を分析対象とする。内訳を表5に示す。

表5 動詞項目の数

話者	場面①	場面②	場面③	場面④	計
A	6	12	11	29	58
B	6	4	9	23	42
C	8	7	2	40	57
D	5	9	4	20	38
G	9	7	5	11	32
H	6	3	5	6	20
K	7	4	7	5	23
L	5	7	5	13	30
O	9	22	1	11	43
P	6	11	16	10	43
計	67	86	65	168	386

アクセントは筆者の聞き取りにより行い、ピッチの大幅な下降位置をマークしていく。その結果、ひとつの動詞項目に複数の下降位置が記録される場合もある。下降の位置や程度が聞き取りにくい場合については、音響分析ソフトPraat (Boersma & Weenik 2020) によりピッチ曲線を表示することで分析の補助とする。

4. 分析結果

本節では、動詞活用の音便形における特殊拍(4.1)とその他の特殊拍(4.2)に分けて、特殊拍を含む音節にアクセント核とみられるピッチの急な低下が生じる場合について分析し、多治見方言の動詞において特殊拍にアクセント核が置かれる条件を整理する。以下では、提示する動詞項目の先頭に整理番号と話者記号を付し、方言形の後の丸括弧内に共通語訳を示す。

4.1 イ音便形に対応する特殊拍

4.1.1 カ行・ガ行五段活用動詞

カ行・ガ行五段活用動詞のうちで、イ音便形を取りうる接続形式で談話資料に現れるのは次の動詞である。

<聞く>, <歩く>, <驚く>, <ビックリコク (=びっくりする)>; <急ぐ>
補助動詞<-おく>

このうち、<急ぐ>は「イソイデ」というイ音便形のみが現れ、長母音化した例はなかったのに対し、<歩く>, <驚く>, <ビックリコク>は長母音化した形のみが現れた。

語幹の最終音節の母音が /i/ である<聞く>は、共通語でも連用形において「キータ」「キー

テ」となり引き音を伴うが、多治見方言でも同様である。ただし、表1の結果でも本稿で検討する談話資料でも、アクセントが特殊拍(引き音)に現れることがあるという点で共通語と異なる。談話資料に現れる例は、[1]のとおりである。その一方で、[2]のように引き音の直前の自立拍にアクセント核が置かれる例もある。

[1] 無核動詞<聞く>で引き音にアクセント核が置かれた例

(331)G キー'タ [ハナシ...] (聞いた話...)

(380)O キー'テヨ (聞いてね)

[2] 無核動詞<聞く>で引き音の直前にアクセント核が置かれた例

(276)C キー'タコトアルチャ (聞いたことがあるといええ)

(284)C キー'タトキニ (聞いたときに)

(366)O キー'タケドヨ (聞いたんだけどね)

<聞く>以外では、カ行五段の無核の補助動詞<-おく>を持つ[3]の1例があり、引き音にアクセント核が置かれた。

[3] 無核の補助動詞<-おく>で引き音にアクセント核が置かれた例

(209)P オクットー'テ (送っておいて)

一方、他の動詞はすべて有核であり、長母音化の有無に関わらず[4]のようにすべて特殊拍(/R/または/J/)の直前にアクセント核が置かれた。

[4] 有核の動詞で特殊拍の直前にアクセント核が置かれた例

(222)B アル'ーテイキョ'ーッタガノ'ー (歩いていっていたけどね)

(350)L オドロ'ートリマ'ス (驚いています)

(357)L オドロ'ータ (驚いた)

(358)L オドロ'ータ (驚いた)

(360)L オドロ'ートルワナ (驚いていますよ)

(332)G ビック'リコ'ーチャッタ (びっくりしてしまった)

(272)D イソ'イデ (急いで)

以上のように、この談話データのうちカ行五段活用動詞音便形では、無核の動詞と補助動詞

の場合に、引き音にアクセントが置かれる例があった。ガ行五段活用動詞は無核の例がないため例証されなかった。

4.1.2 サ行五段活用動詞

サ行五段活用動詞でも、カ行・ガ行と同様にイ音便を生じる地域がある。国立国語研究所(1991)『方言文法全国地図』第92図によれば、例えば過去形「出した」では、東は新潟県の一部、静岡県西部、長野県南部、富山県から西は九州まで、近畿地方などを除いた西日本の広い地域に「ダイタ」やその変異形が広がっている。このうち多治見方言では、サ行五段活用動詞がイ音便として観察されることはなく、共通語と同様に「ダシタ」となるか、音便化する場合は常に長母音化して「ダータ」となる(安藤2013)。サ行五段活用動詞のうちで、音便形を取りうる接続形式で談話資料に現れるのは次の動詞である。

<貸す>, <出す>, <下ろす>

このうち、<貸す>は音便を起こさない語形(「カシ…」)と長母音化した語形(「カー…」)が現れ、<出す>と<下ろす>は長母音化した語形のみが現れた。

無核動詞<貸す>については、A氏の発話3例[5]において引き音にアクセントが置かれ、そのほかの音便を起こさない例[6]では話者によりアクセントの位置にばらつきがあった。伝統的なA氏の発音に対して、音便を起こさない共通語的な言い方においてはアクセントが定まっていない可能性がある。

[5] 無核動詞<貸す>で引き音にアクセント核が置かれた例

- (1)A カー'トクレン'カヤ (貸してくれないか)
- (6)A カー'トクレ (貸してくれ)
- (12)A カー'トットクレヤ (貸しておいてくれよ)

[6] 無核動詞<貸す>で音便を起こさない例

- (2)B カシ'テ (貸して)
- (41)K カシ'テムラエンヤ'ローカ (貸してもらえないだろうか)
- (56)O カ'シテマエン'カシャント… (貸してもらえないかなと…)
- (60)O カ'シテマエン'カシャン (貸してもらえないかな)
- (64)O カ'シテクレル (貸してくれる)
- (67)O カ'シテクレル (貸してくれる)
- (16)C カシテモラエンヤ'ローカ (貸してもらえないだろうか)

有核の<出す>と<下ろす>については、[7]のとおり、引き音の直前の自立拍にアクセント核が置かれる例のみであった。

[7] 有核の動詞で引き音の直前にアクセント核が置かれた例

(244)B セー'ダ'ーテ (精出して)⁴⁾

(31)G オロ'ーテキタゲル'デ (下ろしてきてあげるから)

(39)G オロ'ーテキタアゲル'デ (下ろしてきてあげるから)

以上、限られた数ではあるが、カ行と同様に、サ行五段活用でも、無核動詞においては音便形で特殊拍にアクセント核が置かれる例があった。

4.2 イ音便以外の特殊拍

前節で見たように、動詞のイ音便に対応する長母音化では、いくつかの例で特殊拍(引き音)にアクセント核が観察されたが、本節ではそれ以外のケースで特殊拍にアクセントが置かれる場合を、特殊拍の種類別に観察する。

4.2.1 引き音

多治見方言において、ワ行五段活用動詞は、タ形やテ形では共通語と同様に促音便となる(例「イッテ」(言って)、「クッタ」(食った))が、中止形(例「カイ」(買い))は長母音化(イ音の引き音化)を生じることがある。談話資料の中では、[8]の1例が出現し、引き音にアクセント核が現れた。

[8] 無核動詞<買う>で引き音にアクセント核が置かれた例

(225)A カー'ニイッタラ (買いに行ったら)

このほか、ワ行五段活用動詞では、「ユー'モンデ」(言うので)という1例で引き音にアクセント核が現れた。「言うので」は、共通語と考えられる日本語教育のためのアクセント辞典であるOJADにおいても「いうので」と2拍目にアクセント核が示されており、多治見の「ユー'モンデ」と同様に引き音にアクセント核が置かれているように見える(「言う」の発音はNHK放送文化研究所(2016)によれば「ユー」が標準であり、これに従ってOJADの記述を本稿の表記法に合わせると「ユー'ノデ」となる)。しかし、一般に動詞終止形の末尾が /u/ であることを考えると、実際の発音は長母音であっても、一般の引き音とは区別して考えるべきであろう。

4.2.2 撥音

4.2.2.1 否定辞ン

談話資料において、撥音でアクセント核を持った例は、否定辞の「ぬ」に由来するとみられる「ン」を含むもののみであった。そのうち、特に目立つのが、「いけない、だめだ」の意の「アカン」「イカン」やその初頭母音が脱落した「カン」を持つ[9]の例である。

[9] アカン類の撥音にアクセント核が置かれた例

- (84)D ノンダラアカン'ヨ (飲んではいけないよ)
- (87)D イット'ッタアカン'テ (言っていてはいけないってば)
- (93)D ノンドッタラアカン'デ (飲んでいてはいけないから)
- (94)C デ'ナイカン'カ (出なければいけないか)
- (127)O タノシマ'ナアカン'ゾ (楽しまなければいけないぞ)
- (142)O ヤスマ'ナカン'ゾ (休まなければいけないぞ)
- (150)P ヤラ'ナカン'ト (やらなければいけないと)
- (228)A イカ'ナカン'ト (行かなければいけないと)
- (291)C イレ'ナカン'テ (入れなければいけないと)

このアカン類を持つ場合のうち、[9]の(93)では接続助詞デの直前で撥音がアクセント核を持つが、同じようにデの直前であっても、イントネーションによっては[10]の(131)、(241)のように撥音がピッチの下がり目にならず、むしろ後続する助詞で上昇してから急下降する場合もある。(258)は「カン」が文末にあり、その後のピッチの下降は確認できないが、少なくとも撥音の前の自立拍にアクセント核が置かれていないことは確認できる。一方で、*カンのように否定辞の直前の自立拍にアクセント核が移る例は1例も見られなかった。

[10] アカン類のアクセント核が顕在化しない例

- (131)O イキ'ナカンデ'ー (生きなければいけないから)
- (241)B イッテコ'ナイカンデ'ー (行ってこなければいけませんからね)
- (258)B デト'ラヘンデ'カン (出ていないからいけない)

次に、[11]に示すように、アカン、イカン、カンに含まれる場合以外の否定辞ンを検討する。否定辞ンにアクセント核が置かれるのは、否定辞に先行する動詞が無核の場合である。また、動詞と否定辞の間に、<-くれる>、<-マエル(もらえる)>、<-いく>などの無核の補助動詞あるいは<カモシレン(かもしれない)>に含まれる無核の動詞<しれる>がある場合に

も、否定辞ンにアクセント核が置かれている。

[11] 無核の動詞+否定辞ンで特殊拍にアクセント核が置かれた例

- (17)C イラン'ケドモ (いらないけれど)
- (130)P ヤラン'デヨ'ー (やらないからさ)
- (152)P イケン'ワ (行けないよ)
- (310)C シラン'ケドノ'ー (知りませんけどね)
- (122)O シテケレン'カ (してくれないか)
- (1)A カー'トケレン'カヤ (貸してくれないか)
- (60)O カ'シテマエン'カシャン (貸してもらえないかな)
- (56)O カ'シテマエン'カシャント (貸してもらえないかなと)
- (234)B デテカン'モンデ (出ていかないから)
- (89)C ノ'マヘンカ'モシレン'ケドモ (飲まないかもしれないけれども)
- (318)C アルカモシレン'ケドモ (あるかもしれないけれども)

ただし、この否定辞のアクセントが顕在化しない場合もある。[12]の(233)では、無核動詞<知る>に否定辞ンが後続しているが、否定辞にアクセント核が現れていない。これは、後述の[18]の例(9), (11)と同様に、終助詞ゼンがアクセント核を持っていることによるものであると考えられる。また、[12]の(239)では、[10]の(131), (241)と同様に、後続する助詞デで上昇してから急下降するイントネーションによるものであろう。

[12] 無核の動詞+否定辞ンで否定辞のアクセント核が顕在化しない例

- (233)B シランゼ'ンデノ (知りませんのでね)
- (239)B ホットクワ'ケニイカンデ'ー (放っておくわけにいかないから)

1節で紹介した安藤(2016)の読み上げ調査では、この否定辞ンの後のピッチが不明であったが、[11]から、少なくとも後続要素が接続助詞ケド、デ(=から)、終助詞ワ、カ、形式名詞モン等の場合には、イントネーションの影響がない限り、撥音にアクセント核を置いてその後ピッチが下降することが明らかになった。

これに対し、[13]のように否定辞の直前の動詞語幹または補助動詞語幹にアクセント核がある場合には、撥音に核が現れていない。

[13] 有核の動詞+否定辞ンで特殊拍の直前にアクセント核が置かれた例

- (10)B オチ'ン₁ヨーニ (落ちないように)
- (73)B カエレ'ン₁ヨーンナ'ルト (帰れなくなると)
- (128)O ヤルカ'モワカラ'ン₁ケド (やるかもしれないけど)
- (133)P ノメ'ン₁カラヨー (飲めないからさ)

以上から、否定辞ンは無核の動詞に後続する場合には、潜在的にアクセント核を持つと考えられる。アカン類は否定形以外で現れないため他の動詞と同様に扱うことができないが、語源とされる「(埒が) 明かぬ」「行かぬ」(『日本国語大辞典第二版』による)の終止形「明く」「行く」が無核であることからすると、他の無核動詞と同じメカニズムによって撥音がアクセント核を持つと考えることができる。

4.2.2.2 否定辞ヘン

「(連用形+) ~はしない」に対応する否定辞の(未然形+)ヘンについても、否定辞ンとの比較のために検討する。[14]の例から、ヘンの前が無核であればヘンの直前に核があることがわかる。ここでは、無核動詞<やる><使う><当たる>のほか、無核の補助動詞<-くれる>にヘンが後続している。[15]では、(308)の例外を除き、前の語が有核であれば2つ前の拍にアクセント核がある。ここでは、有核動詞<飲む><ある><動く>と有核の補助動詞<-オル>(258), <-チャ'ウ>(315), <-イリヤ'ース>(=-いらっしゃる)(364), (365)が例証されている。いずれも、ヘンの内部ではピッチの大きな下降は見られず、ヘンは前節の否定辞ンとは別の振る舞いとなっている。

[14] 無核+否定辞ヘンでヘンの直前にアクセント核が置かれた例

- (83)A ノマ'セテクレヤ'ヘン₁デ (飲ませてくれないから)
- (129)O ヤリヤ'ヘン₁ナ (やらないな)
- (307)D ツカヤ'ヘン₁カ (使わないか)
- (319)D アタラ'ヘン₁デ (当たらないから)

[15] 有核+否定辞ヘンでヘンの2拍前にアクセント核が置かれた例

- (89)C ノ'マヘン₁カ'モシレン'ケドモ (飲まないかもしれないけれども)
- (143)O ア'ラヘン₁デー (ないので)
- (207)P ノ'マヘン₁モンデネ (飲まないものだからね)
- (258)B デト'ラヘン₁デ'カン (出ていないからいけない)

- (262)B ウゴ'キヤヘンデノ (動きませんからね)
(315)D ツカッチャ'ヤヘン (使ってしまった)
(364)K シンデ'ワイリャ'ーヘン (死んではいらっしやらない)
(365)L シンデ'ワイリャ'ーヘン (死んではいらっしやらない)
例外 (308)C ワカラ'ヘンケドノ (わかりませんが)

なお、[16]に示す例では、場面②「けんかをする」の設定で感情的に言い返しており、否定辞のアクセントが顕在化しているが、アクセント核が置かれるのは撥音ではなくその直前の拍「へ」であることがわかる。

[16] 否定辞ヘンのアクセントが顕在化した例

- (103)H ノ'ンドラヘンゾ (飲んではいないぞ)

いずれにおいても、否定辞ヘンの撥音でアクセント核になる場合は観察されなかった。

ただし、例えば「ウタウト」(歌うと)、「イレルト」(入れると)のように無核(一類)動詞に接続助詞トが後続するとトの直前(動詞の末尾)にアクセント核が置かれることが安藤(2016)の調査からわかっており、そのようなタイプの助詞が後続して「ウタウヘント」「イレーヘント」のようになった場合には、否定辞ヘンの撥音がアクセント核を持つ可能性がある。[16]から、否定辞ヘンが潜在的に持つアクセントは「へ」拍であると考えられるが、様々な後続要素が付いた場合でも撥音にアクセントが現れないと断定することはできない。

なお、1節の読み上げ調査では、一段活用動詞でヘンの前が長音化する場合について述べたが、談話資料には長音化の例はなかった。

4.2.2.3 否定過去ナンダ

過去の否定を表すナンダは、本稿のデータでは無核動詞<知る>に後続するケースしか例証されなかったが、[17]に挙げるようにすべて撥音の直前の拍「ナ」にアクセントが置かれた。

[17] 否定過去ナンダの出現例

- (223)B シラナ'ンダワ (知らなかったよ)
(224)A シラナ'ンダラ'ー (知らなかったところ)
(227)A シラナ'ンダモンデ'ー (知らなかったものだから)
(231)A シリャ'ーヘナ'ンダラ (ご存じなかったのなら)
(368)P シラナ'ンダケド (知らなかったけど)

[17]の例はすべて動詞<知る>を含むが、別のデータ（安藤2016）でも、一段動詞<入れる><並べる>（以上一類動詞）、<受ける><答える>（以上二類動詞）でも回答のすべてにおいて「～ナ'ンダ」となっていることから、前接する要素に関わらず撥音の直前の拍にアクセントが置かれると考えられる。

4.2.2.4 否定辞以外の撥音

否定辞以外の動詞句に現れる撥音としては、[18]に挙げるとおり、準体助詞「の」に対応するン（(278), (282), (295)）のほか、終助詞のゼン（(9), (11), (233)）、マ行五段活用動詞の撥音便（(103), (300)）、格助詞ニの母音が脱落したもの（(73)）、未然形に接続する尊敬語命令形～ンシヨ（(8)）があったが、いずれも撥音にアクセント核が置かれる例はない。

[18] 否定辞以外の撥音の出現例

- (278)C アタッタ'ンヤケドモ'ー（当たったんだけど）
- (282)C キエ'チャッタ'ンヤケドモ'ー（消えちゃったんだけど）
- (295)C アタッタ'ンヤケドモ（当たったんだけど）
- (9)A カリ'テクゼ'ン（借りていきますよ）
- (11)B タノ'ムゼ'ンテ（頼みますよ）
- (233)B シランゼ'ンデノ（知りませんのでね）
- (103)H ノ'ンドラヘ'ンゾ（飲んではいないぞ）
- (300)C ノ'ンダリシテ'モ（飲んだりしても）
- (73)B カエレ'ンヨー'ンナルト（帰れなくなると）
- (8)B モ'ッテカ'ンシヨ（持っていきなさい）

以上から、本稿のデータのうち、撥音がアクセント核を持つのは無核の動詞に後続する否定辞ンの場合であるといえることができる。

5. まとめ

本稿では、多治見方言の談話資料を基に、動詞活用形において特に特殊拍にアクセント核が置かれる条件について分析した。その結果、次のことが明らかになった。

- (a) 無核でイ音便を取りうる連用形は、長母音化して引き音にアクセント核を持ちうる。
- (b) 無核のワ行五段動詞の連用形+接続助詞ニにおいて、活用語尾が引き音となりアクセント核を持ちうる。

(c) 無核の動詞に後続する否定辞ンはアクセント核を持ちうる。

このうち(a)の点は、有核動詞<裂く><出す>の過去形「サー'タ」「ダ'タ」と無核動詞<咲く><抱く>の過去形「サー'タ」「ダ'タ」が弁別されるという安藤(2016)の考察に合致する。

1節で述べたとおり、以前の調査(安藤2016)によって、次の(i), (ii)のタイプがあることがわかっていたが、本稿の調査により、(iii)のタイプがあることが明らかになった。(iii)もイントネーションや後続の要素によってアクセント核が顕在化しない場合はあるが、(i)と(iii)との違いは、特殊拍がピッチの下がり目とならない場合に直前の拍に下がり目に移るか否かという点である。

- (i) カ行・ガ行五段活用動詞の連用形のように、特殊拍とその直前の拍の間でアクセント核のゆれが見られる語形。
- (ii) 意志形「～(ヨ)'ー」や希望形「～タ'ー」、仮定形長形のように、特殊拍の前にアクセント核が置かれる語形。
- (iii) 無核動詞+否定辞ンのように、基本的に特殊拍がアクセント核を持つ語形。

本稿の調査のデータの量は、当該方言の特殊拍をめぐるアクセントの記述に十分とは言えず、さらなる談話資料を分析することにより、本稿で抽出できなかった条件が見いだされる可能性もある。安藤(2016)に見られる地理的分布からすると、この特殊拍におけるアクセント核は古い特徴である可能性があり、今後の変化を注視する必要がある。

最後に、本調査に御協力いただいた調査対象者の皆様に、心より御礼申し上げたい。

注

- 1) このほか、一類のガ行五段動詞<注ぐ>も調査したが、終止形を含む結果から二類動詞のアクセントの特徴が顕著であった。「あまり使わない言葉だ」との回答者からの意見を踏まえ、当該方言話者にとって一類の語として扱うことに疑問が生じることから、本稿での紹介は省略する。
- 2) 例えば「キ'ーテミ'ル」「キ'ーテミ'ル」のようにピッチの大幅な下降が複数個所現れた場合もあったが、ここでは主動詞の方の下降位置が特殊拍であるか否かに注目するため、1つ目の下降位置のみを集計する。
- 3) 読み上げ調査において、特殊拍にアクセント核が置かれる型は、多治見市の中央部～東部では少なく、南部や北西部に比較的多いことも明らかになった(安藤2016: 52)。ただし、本稿の調査対象とした談話資料では、中央部～東部の話者が多く、地理的分布についての再確認はできていない。
- 4) 「セー」(精)でも引き音にアクセント核が現れている。<セーダス>「精出す」は名詞+動詞の複合動詞であり、名詞部分の特殊拍についてはここでは追求しない。名詞の特殊拍にアクセント核が現れる場合は限定的であるが、ほかにも「アレン'タ」(=あの人たち)などに現れる例がある。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP19K00600 の助成を受けたものである。

参考文献・資料

- 安藤智子 (2013) 「多治見方言における連母音の長母音化について」『富山大学人文学部紀要』 58: 23-60
- 安藤智子 (2016) 「多治見方言における動詞のアクセント (1)」『富山大学人文学部紀要』 64: 39-69
- 安藤智子 (2018) 「多治見方言における 1 拍音節の時間長についての予備的分析」『富山大学人文学部紀要』 69: 89-103
- 安藤智子 (2019) 「多治見方言における語頭の韻律的特徴 : 1 拍音節の長さと言上がりについて」『富山大学人文学部紀要』 70: 109-127
- 安藤智子 (2020) 「東濃西部方言の節初頭におけるプロソディの特徴」『KLS Selected Papers』 2: 177-192
- 国立国語研究所 (1987) 『方言談話資料 (9) - 場面設定の対話 -』 国立国語研究所資料集 10-9
- 国立国語研究所 (1991) 『方言文法地図第 2 集 - 活用編 1 -』 財務省印刷局
- 小学館国語辞典編集部編 (2000-2002) 『日本国語大辞典第二版』 小学館
- 山口幸洋 (2003) 『日本語東京アクセントの成立』 港の人
- Boersma, Paul & Weenik, David (2020) Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version. 6.1.09, retrieved 20 March 2020 from <https://www.fon.hum.uva.nl/praat/>
- NHK 放送文化研究所 (2016) 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』 NHK 出版
- OJAD (Online Japanese Accent Dictionary): <http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/> (2020.10.17 最終閲覧)